

建築文化賞

環境に配慮した建築物

地域の人と共に暮らす快適なすまい

Villa99 I期 (OMOYA)

建築主：鈴木敬一

設計：鈴木隆+更田章司

+ (株) ARKプランニング

施工：(株) ARKプランニング

所在地：山武市下横地



南北の引戸を全開にすることで室内外が一体化する(南側外観アプローチより見る)

(撮影/鈴木 隆)

「Villa99」は九十九里浜にほど近い農村小集落内の敷地とその周囲の計画であり、「OMOYA」は木造平屋建30坪の専用住宅のI期計画である。定年退職後に建主夫婦は生家であるこの地に戻り、友人達や地域と暮らすことを選択した。

「OMOYA」は「借景・庇・縁側・続間・打水」といった日本伝統民家の空間要素を現代的に再構築しているという。夏冬共に冷暖房に頼らない工夫が随所に施される。

平面計画は南北に開口部を有する東西に続間のある単純な形状で南側は大庇を設け、夏の日射を防ぎ浜からの風を通す。大庇の下は打水の蒸散効果により冷やされた空気を室内に取り込む。中間期は南北面建具を全開放し、内外の境界のない生活が実現できる。実際全開放した部屋で不都合はないのか。建主夫婦は生活に満足し自然の恩恵を享受し気持ちよく生活しているという。そして冬は直射光を室内まで取り込み、床下に蓄熱できる構造としている。加えて細長い葉の密集するイヌマキの生垣は地域特有の冬の西風を防ぐそうだ。

建物の象徴は中央のLDKホールである。南側の

縁側は近隣住人との交流の場、友人が集う場である。生垣は家の外壁の一部となり、建物と生垣で挟まれた庭はインテリア空間として最大限に拡張されて視界を広げる。

建主夫婦の第2の人生のイメージが明確に表現され、設計は細部まで検討し、丁寧に作り上げていると感じた。それは押しつけではなく、自然の恩恵と人々の温かさを緩やかに感じられる住居となっている。「Villa99 II期・III期」は健康食カフェやゲストハウスの計画が視野にあるという。その時「OMOYA」と建主夫婦はどのように変化しているのだろうか。

(藤本 香)



墨入モルタル表面に張られた水幕(庇下内観)



東西方向に引戸を介して一体化する空間

(撮影/野田 東徳)